Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology
Newsletter

第 100 号　2026 年 11 月 6 日
発行：日本青年心理学会事務局

■目次

＜広報・ニューズレター編集委員会企画＞
1. ニューズレター（ニュース・レター）創刊号をひらく
白井 利明：日本青年心理学会ニューズレター第１００号，おめでとうございます。 …… 2
2. 会員のみなさんに聞く「日本青年心理学会との出会い」
安居 元紀：私が日本青年心理学会に入会したきっかけ …… 4
風間 惇希：「何者でもなかった私」を受け入れ育ててくださった日本青年心理学会の思い出 …… 4
村井 史香：研究者への入り口としての日本青年心理学会 …… 4
吉田 加代子：入会からこれまでを振り返って …… 5
宗田 直子：アイデンティティ発達を見つめて――次代を開く学会への思い―― … 5
髙坂 康雅：日本青年心理学会の思い出とこれから …… 6
下坂 剛：ワープロと因子分析 …… 6
茂垣 まどか：受け取った「探究の熱と楽しさ」を次の世代へ …… 7
齋藤 信：学会ニューズレターとの関わりについて …… 7
園田 直子：日本青年心理学会，20 年目の初参加 …… 8
高井 範子：日本青年心理学会および関西地区青年心理学研究会の懐かしい思い出 8
＜会員から：私のおすすめ，この一冊＞
水本 深喜：エリック・バーン（著）菅沼 憲治・水本 深喜（訳）田研出版（2026 年刊）『しあわせの谷』――半世紀を経てお届けする「脱皮」の物語―― …… 9
＜ニューズレターのロゴマークが新しくなりました＞ …… １０
＜広報＞
広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ …… １０
事務局からのお知らせ …… １１

＜広報・ニューズレター編集委員会企画＞

第 1 号から始まったニューズレターは，今回，第 100 号を迎えます。第 100 号の節目を記念し，「ニューズレター（ニュース・レター）創刊号をひらく」と「日本青年心理学会との出会い」をテーマとして特集を企画いたしました。世代を越え，多くの会員の皆様から温かいご寄稿をお寄せいただきました。

入会当時の懐かしいエピソードや，学会活動を通じて得たかけがえのない繋がり，そして未来の学会への期待など，多彩な視点から「私たちの歩み」を振り返る貴重な誌面となっております。ご寄稿いただきました皆様に心より御礼申し上げますとともに，本特集が会員同士の新たな対話や交流のきっかけとなれば幸いです。

（担当：広報・ニューズレター編集委員 信太 寿理・赤木 真弓）

＜広報・ニューズレター編集委員会企画＞
1. ニューズレター（ニュース・レター）創刊号をひらく

日本青年心理学会ニューズレター第１００号，おめでとうございます。

白井 利明
（大阪教育大学名誉教授）

日本青年心理学会ニューズレターの発展のためにご尽力いただきました全ての方々に，心からお礼申し上げます。

「日本青年心理学会ニューズレター」は「青年心理学研究会ニュース」を引き継いだものです。1986 年 9 月 5 日，私が青年心理学研究会の事務局を担当していた時に創刊しました。

研究大会の間の交流を活発にするためでしたが，個人的に楽しかったです。気軽に声のかけられないような立派な先生方に，自分が知りたいと思うことを自由に尋ねました。すると，どなたも断らず，引き受けてくださいました。しかも，研究会でお会いすると，ねぎらいの言葉までかけていただきました。こうして私は育てられました。幸せでした。

この度，日本青年心理学会ニューズレター委員会が「青年心理学研究会ニュース」創刊号も紹介してくださるとのこと，嬉しいです。全号揃っていないのですが，私の持っているものが残っている唯一のものです。日本青年心理学会ニューズレター（紙媒体）の方は，私以外では小塩 真司先生が 1998 年の NL 第 16 号以降をお持ちとのことです。大切に保管していただきたいと思います。

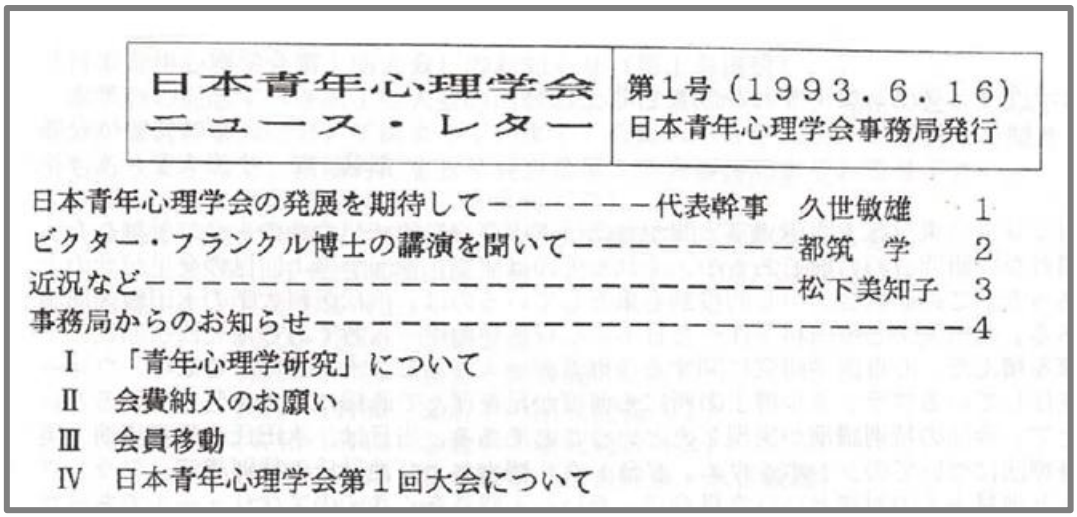
青年心理学研究会の歴史を調べて驚いたことに，1980 年 5 月 1 日の会員名簿で，大学院在学中は会員 68 名中 4 人だけでした。何人かの方に尋ねると，1980 年代に入るまで，院生は指導教員から入会を勧められなかったようです。

ニューズレター第 99 号の第 34 回大会準備委員長挨拶で，平石 賢二委員長が依田 新先生のことにふれ、「青年は未来である」という言葉を紹介されました。日本青年心理学会は青年を応援する学会ですから，若い会員を大事にして，若い会員が活躍する姿がみられることを期待しています。

日本青年心理学会と日本青年心理学会ニューズレターのますますの発展をお祈り申し上げます。

日本青年心理学会会員の白井 利明先生より、ニューズレター（当時は「ニュース・レター」）創刊号のデータをご提供いただきました。白井先生、本当にありがとうございました。

創刊号にはさまざまな記事が掲載されており、そのすべてをご紹介することは叶いませんが、ここでは紙面の一部をご紹介します。当時の学会やニューズレターの雰囲気を感じ取っていただければ幸いです。（なお、以下に登場する方々の役職は、いずれも当時のまま表記しております。）



日本青年心理学会
ニュース・レター

第1号（1993．6．16）
日本青年心理学会事務局発行

日本青年心理学会の発展を期待して――――――代表幹事　久世敏雄　1
ビクター・フランクル博士の講演を聞いて――――――都筑　学　2
近況など――――――松下美知子　3
事務局からのお知らせ――――――4
Ⅰ　「青年心理学研究」について
Ⅱ　会費納入のお願い
Ⅲ　会員移動
Ⅳ　日本青年心理学会第１回大会について

日本青年心理学会のニューズ・レター第 1 号が発行されたのは，1993 年 6 月 16 日。日本青年心理学会が同年 4 月 1 日に新たな学会として発足してから，間もない頃のことでした。創刊号をみることで，学会がまさに歩み始めた当時の雰囲気が伝わってきます。

第 1 号の巻頭を飾るのは，久世 敏雄代表幹事による「日本青年心理学会の発展を期待して」です。そこでは，青年心理学研究会から日本青年心理学会へと発展した経緯に触れながら，会員相互の信頼・協調・連帯を大切にし，学会をさらに発展させていくことへの期待が語られています。続いて，都筑 学会員による研究会参加記，松下 美知子会員による「近況など」が掲載されており，研究だけでなく，会員それぞれの経験や日常を伝え合う場としてのニューズレターの姿もうかがえます。

また，創刊号には，同年 11 月に開催される日本青年心理学会第 1 回大会の案内も掲載されています。講習会，若手の研究発表，テーマセッション，シンポジウムなどが企画され，会員に積極的な提案や応募を呼びかけています。現在へと続く学会活動の一つひとつが，ここから形づくられていったことが感じられます。

さらに興味深いのが，創刊号の後半に収められた「日本青年心理学会設立の趣旨」です。当時 115 名だった会員とともに新たな学会を設立するにあたり，「一人ひとりの会員の意見を大切にする民主的運営」「会員同士の開かれた親密な関係」「若い研究者を育てようとする努力」，そして多様な研究方法を尊重する姿勢などが掲げられています。年次大会の開催，機関誌の刊行，そして「研究に関わる情報を速く伝え，日常的なレベルでの交流を目指すニュース・レターの発行」も，学会の活動として明記されていました。

それから 30 余年。第 1 号から始まったニューズレターは，今回，第 100 号を迎えます。創刊号に記されていたのは，新たな学会への期待と，これから研究や交流の場をともにつくっていこうとする思いのように感じました。第 100 号という節目に，学会とニューズレターが歩み始めた頃の様子を，少しでもお伝えできたなら幸いです。

（文責：信太）

2. 会員のみなさんに聞く「日本青年心理学会との出会い」

私が日本青年心理学会に入会したきっかけ

安居 元紀
（広島大学大学院）

私が日本青年心理学会に入会したきっかけは，第 31 回大会 （2023 年，早稲田大学）に参加したことでした。大会で印象に残ったのは，ひとつひとつの発表について熱心に議論する先生方の姿です。初めて大会に参加した私は，コメントの鋭さに圧倒され，「この議論に自分もついていけるようになるのか」と不安に感じたことを覚えています。一方で，日本の青年のありようについてこれほどじっくりと議論する場があることに強く惹かれ，私自身も同じような熱意をもって研究に向き合いたいと思い，入会しました。現在は，日本の若者がアイデンティティを形成していく過程について，ひきこもり傾向のある人々を対象として研究しています。青年の発達を日本の社会や文化との関係から考えるうえでも，本学会での議論から学ぶことは多いと感じています。

改めまして，ニューズレター第 100 号の発刊，誠におめでとうございます。今年度からは国際交流委員も担当させていただくこととなりました。まだまだ勉強中の身ですが，学会の発展に貢献していけるよう努めていきたいと思います。

「何者でもなかった私」を受け入れ育ててくださった日本青年心理学会の思い出

風間 惇希
（三重大学）

この度はニューズレター第 100 号特別企画への寄稿という大変光栄な機会を頂きありがとうございます。私は指導教員だった平石 賢二先生からのご紹介で入会したのが始まりでした。何より思い出深いのは，初めての大会参加にしていきなり大会準備委員を務めた名古屋大学での第 22 回大会です。当時 M2 で，学会というコミュニティもろくに知らない「何者でもなかった私」が，学会大会の運営側として参加したのです。その大会を通して，学会の温かい雰囲気や，研究に真摯に向き合い議論されている先生方の姿を目の当たりにし，「ここを自分の拠り所にしたい」と感じることができました。

次の第 23 回大会で，発表枠を 2 つ使ったロングセッションを決行したのも印象深い思い出です。課題の多い内容ながら，その後に論文投稿の推薦をいただき，査読者の先生方のご指導を受けながら（これまた長～い）論文にすることができました。それが後に学会賞を頂くものになります。ここで何となく「学会コミュニティのひとり」になれたように思います。今では学会の委員仕事も仰せつかるようになり，微力ながら学会運営に携わっています。気づけば自分の青年期も終わっていました。今の自分があるのは，この学会のおかげです。少しずつ，このご恩を学会に返していこうと思います。

研究者への入り口としての日本青年心理学会

村井 史香
（北星学園大学）

2018 年秋，私は初めて日本青年心理学会に参加した。当時は新卒の心理職として病

院に勤務しながら，夜は図書館で論文を書いていた。修士修了後，進路にさんざん悩んだ末に就職を選んだものの，研究への思いも捨てきれず，もがいていた時期だった。

「友人関係のキャラ」という，一見すると軽い話題にも思えるテーマを選んでしまう自分が，果たして研究で食べていけるのか，自信がもてなかった。寝ても覚めても研究をしていそうに見えた先輩と比べると，私の「研究が好き」は心もとなく感じられた。それでも，研究を諦めきれない。そんなときに参加したのが日本青年心理学会だった。初めての口頭発表では，緊張で頭が真っ白になるかもしれないと思い，話す内容をすべて原稿にして読み上げた。発表したのは，「キャラ」と承認欲求との関連についてである。発表後，多くの先生方からあたたかいコメントをいただいた。

会場からの帰り道，「なんとかやっていけるかもしれない」――そう思った。私にとって日本青年心理学会は，研究者として歩み始める入り口になった。

入会からこれまでを振り返って

吉田 加代子
（立正大学）

私は大学院の心理職養成のコースに進学しましたが，所属したゼミでは多くの学生が日本青年心理学会に入会しており，私も自然と入会することになりました。初めて参加した大会では卒業論文を発表しました。とにかく不安でいっぱいでしたが，私自身が迷っていた点について具体的なコメントをいただけたことを憶えています。その後，大学院を離れて臨床に身を置いていた数年間は学会からも遠ざかっていましたが，大学に職を得たことをきかっけに，学会活動を再開しました。しばらくぶりに戻ってきた学会は，青年への支持的な眼差し，若手を育てようという雰囲気，そして活発な議論も昔のままでした。

西平（2000）は，青年心理学の特徴として，自然科学と精神科学の 2 つの源流があること，特に後者は「ある心理現象，ある行動がその人の人生に対して持つ意味」を追求する立場であるとしています。臨床心理学の中でも力動的心理療法に関心を持つ私が，日本青年心理学会とつながり続ける理由は，そうしたところにもあるのだろうと思っています。

引用文献

西平 直喜（2000）． 青年心理学の特質と方法 西平 直喜・吉川 成司（編著） 自分さがしの青年心理学（pp.2-20） 北大路書房

アイデンティティ発達を見つめて
――次代を開く学会への思い――

宗田 直子
（福山大学）

ニューズレター第 100 号の発行を心よりお慶び申し上げます。

私にとって本学会は研究者としての原点であり，常に温かく迎え入れてくれる大切な場所です。青年期から成人期にかけてのアイデンティティ発達を研究する中で，この豊かな地で培われた先生方や諸先輩との議論は，私の研究を支える大きな糧となってきました。

2005 年の第 13 回大会での口頭発表が私の学会デビューでした。その内容は『青年心理学研究』第 17 巻に原著論文（岡本 祐子先生と共著）として掲載されました。2007 年に開催された第 15 回大会では，大会委員長の岡本 祐子先生のもとで大会準備委員を務

め，佐藤 有耕先生座長のもとで行った発表は第 25 巻に掲載されました（岡本 祐子先生と共著）。さらに 2023 年の第 31 回大会，原田 新先生座長のもとでの発表は第 37 巻に掲載されるなど，本学会は発表から論文へ至るプロセスで常に私を成長させてくれました。多大なご指導をいただき，熱心に研究を導いてくださった岡本先生には深く感謝申し上げます。

これらの研究が実を結び，2026 年 2 月に立命館大学より学位（博士（心理学））を授与いただきました。審査では，主査としてきめ細やかなご指導をいただいた宇都宮 博先生，副査として温かいご指導をいただいた白井 利明先生，また土田 宣明先生をはじめ，多くの諸先輩にご指導いただきました。近年は研究委員を仰せつかり，学会活動に関わらせていただけることも大きな喜びです。研究者としての私を励まし，支え続けてくれた本学会に厚く御礼申し上げます。

第 100 号の節目を経て，本学会が次代を開く若い研究者を育む研鑽の地であり続け，豊かな知見を発信していくことを願い，お祝いの言葉とさせていただきます。

日本青年心理学会の思い出とこれから

髙坂 康雅
（和光大学）

私が日本青年心理学会に入会したのは，北海道教育大学大学院に入学したばかりの 2002 年 4 月でした。同年名古屋市立大学で行われた第 10 回大会で初めて参加し，学会は発表しなければ面白みがないと痛感し，第 11 回大会（大阪大学）で，「青年の心理的自立と家族機能との関連」というタイトルで，初めての学会発表を行いました。発表後，平石 賢二先生から声をかけていただきました。どんなことをお話しいただいたのか覚えていませんが（申し訳ありません），自分の研究を指導教員ではない他の先生方が真剣に聞き，コメントをいただける学会のあり方に魅力を感じ，「自分のホーム学会」として，日本青年心理学会に在籍し続けています。

あまり気づかれていませんが，私は 2006 年の第 14 回大会（愛知学院大学）から 2025 年の第 33 回大会（筑波大学；国立オリンピック記念青少年総合センター）まで，20 大会連続で口頭発表をしています（うち 1 回は研究委員会企画シンポジウム）。2026 年の第 34 回大会（名古屋大学）にもエントリーしていますので，21 大会連続はほぼ確定で，これまでも，そしてこれからもおそらく出ないであろう記録に，ひとりで取り組んでいます。

今後も，私を育ててくれたホームである日本青年心理学会発展のために，研究し，発表し続けていきたいと思っています。

ワープロと因子分析

下坂 剛
（四国大学）

隔世の感。それに尽きる。私が日本青年心理学会の大会で初めて口頭発表させていただいたのは，神戸大学大学院修士課程 1 年の 1997 年のことである。学会入会のきっかけは，私は別の先生のゼミ生だったが，齊藤 誠一先生（現・大阪信愛学院大学）のゼミ生がたくさん入るのに誘われ，一緒に入会したのだと思う。当時の齊藤ゼミには同期に西田 裕紀子さん（現・国立長寿医療研究センター）がいて，院生ながら共同研究で活躍されていた。齊藤先生が阪神･淡路大震災を契機とした科研を取られていた関係で，共同研究の端に入れていただき，大変貴重な経験を積ませてもらった。大した貢献もし

ていないのに，「キレ行動」の口頭発表や紀要論文では筆頭著者にしていただいた。齊藤先生や西田さんのご配慮だったと思う。当時は PC でなくワープロで論文を書いていた時代で，因子分析の表で因子負荷量を一つずつ入力したのを覚えている。この苦行が原因か，今でも因子分析の研究が多くなってしまった。当時の恩を改めて思い出す機会となったことに感謝したい。

受け取った「探究の熱と楽しさ」を次の世代へ

茂垣 まどか
（帝京大学短期大学）

ニューズレター第 100 号という素晴らしい記念号に寄稿の機会をいただき，大変光栄です。

私が初めて本学会の大会に参加したのは，忘れもしない 1998 年。修士課程に入りたての“ぴかぴかの院一年生”でした。口頭発表やシンポジウムでの熱い議論に感動し，教科書や論文で拝見するような先生方がフロアで発言する姿に胸を躍らせたものです。研究者のスタート地点に立った私にとって年次大会は，濃密な学術の世界を堪能できる血湧き肉躍る場所であり，同時に若輩者にも温かい目を向けてくださる場所でした。臆することなく発言し，問いを持ち続ける大切さを学びました。

気づけば 2026 年，我が家の息子も高校 3 年生の“青年”です。四半世紀の間，出産や子育て，非常勤生活，日々の学内業務などに追われ，正直なところなかなか形にできない部分もあります。ですが，周囲の先生方から声をかけていただき刺激を受けたりして，大会参加などを通してかかわり続けることで私の中の研究の種火は消えず，最近も伝記研究のおもしろさを伝えたいと思うなど，私の中に“学問のおもしろさ”が残り続けています。

この種火のベースには，本学会の温かく育てる雰囲気があるのだと実感しています。ここ数年は大会運営 WG や査読等の役割も担うようになってきました。私がこれまで受け取ってきた「受容される安心感」や「学者として対等にたたかう気持ち」，「議論の楽しさ」などを，これからは次の世代へと還元していきたいと考えています。

学会ニューズレターとの関わりについて

齋藤 信
（鈴鹿大学）

第 100 号記念特集記事の執筆機会をいただき，誠にありがとうございます。本記事では，私とニューズレターの関わりについて，述べさせていただければ幸いです。

私は 2005 年に学会に入会して，手元にある紙媒体のニューズレターで最も古いものは，第 36 号（2005 年 3 月 7 日発行）になります。当時は学会事務局が名古屋大学にあり，平石 賢二先生が事務局長をされていました。私もお手伝いをして，ニューズレターを印刷して冊子体にして郵送していたことを覚えています。

はじめてニューズレターに寄稿したのは，第 49 号（2009 年 6 月 30 日発行）で，タイトルは「＜海外学会報告＞アイデンティティ形成学会第 16 回大会に参加して」でした。やはり学会の刊行物にはじめて掲載されたもので，感慨深かったことを思い出しました。

広報・ニューズレター編集委員は 2020 年 4 月から 2026 年 3 月までの 6 年間，ラストの 2 年間は委員長を務めました。委員会の仕事では，研究テーマなどから執筆を依頼できる先生方を考えたりします。難しさもありましたが，完成して発行できたときには，

やはり充実感がありました。委員として一緒に活動させていただいた皆様，また寄稿してくださった皆様にあらためて御礼申し上げます。

はじめに戻りますが，第 36 号から第 100 号にいたるまで，自分自身も学会でお世話になり，それと同時に学会の歴史も蓄積されてきたのだと思います。振り返ってみて，ニューズレターは，学会での出来事や行事，そのときの思いなどを残しておく意義があるのかなと思いました。第 100 号の節目を迎えまして，今後ともニューズレターが学会とそこに関わってきた人たちの歩みを紡いでいくことを祈念しております。

日本青年心理学会，20 年目の初参加

園田 直子
（久留米大学）

日本青年心理学会には，時間的展望の研究をしていたことから約 20 年前に入会しましたが，福岡在住で子どももいたため遠方への出張を控えており，長らく「学会誌を読むだけの会員」でした。

転機となったのは，2024 年から大野 久先生が主催する「伝記分析」の Zoom セミナーに参加したことです。もともと人の人生に関心があり，25 年以上前には学部のゼミで学生と伝記を読む授業もしていました。大野 久先生がエリクソンの理論を基盤として伝記分析を学術的に展開されていることを知り，人の人生を心理学の視点から分析することに改めて興味をもちました。

そのご縁から，2025 年の日本青年心理学会第 33 回大会で伝記分析のワークショップが企画された際，初めて学会に参加しました。小規模でアットホームな雰囲気で，以前の研究仲間とも再会し，とても居心地のよい学会だと感じました。

伝記分析との出会いは授業にもつながりました。今年は，青年期を描いた映画，漫画，アニメなどを学生自身が選び，登場人物のアイデンティティ形成という視点から分析する授業を試みました。学生たちは予想以上に熱心に取り組みました。

日本青年心理学会とのご縁から，研究生活の終盤になって，青年期のアイデンティティを考える新しい素材と方法に出会えたように思っています。

日本青年心理学会および関西地区青年心理学研究会の懐かしい思い出

高井 範子
（大阪行岡医療大学）

思い返せば，私の学会デビューは 1995 年の日本青年心理学会でした。発表時間がなんと 90 分！その長さに卒倒しそうになった思い出があります。しかし，司会の先生やフロアーの先生方のあたたかいお心遣いもあり，無事に終えることが出来ました。私は，“院生時代は広範囲に学ぶことが仕事”と考えていたので，日本青年心理学会および複数の主要な学会は全日程フルに参加していました。最新の心理学知見を学ぶ貴重な機会だからです。しかし懇親会まで参加した学会は日本青年心理学会のみです。こじんまりした学会ならではの良さが多分にありました。第一線で活躍されている先生方や大御所の先生方と身近にお話ができ，色々なアドバイスを頂けるという貴重な機会でした。有難うございました。また，神戸で開催されている関西地区 青年心理学研究会も楽しい思い出です。発表者の研究を更に良くしていくために皆で率直な意見交換をし，また，研究会後は居酒屋さんに場所を移して，更に忌憚のない意見交換。ほろ酔いの先生方のお話がこれまた面白い！ 懐かしい思い出です。

私は人生の寄り道をしていたので学問の世界に入るのがかなり遅く，研究者としての時間が少なかったのですが，退職を目前にして振り返れば，その寄り道が研究に大いに役立ちました。“人生に無駄なものはない”と言われる通りです。私の研究の大枠は“生き方態度”ですが，生きる営みにはあらゆる心理学的要素が含まれます。私は生きる上において“納得”を重視してきました。また，“自分の中にブレない軸を持つ”（他者評価は気にしない），“ありのままの自分を生きる”（不器用なのでこれしか出来ない）といったことで，色々な方々と忌憚のない意見交換をしてきた気がします。また，人生の様々な局面での“意味”を考えることは思考の沈潜化，多角化につながりました。医療系大学に異動してからは医療者との共同研究において患者様へのインタビューを実施し，今まで余り顧みられてこなかった患者様の辛さや現状を取り上げ，筆頭著者として心理学の視点からいくつかの提言を含めた論文を執筆しました。その経験から感じることは，海外の学会はたとえ abstract であっても，斬新で興味深い視点だと読者から大きな反響があった場合は即座に著者に積極的にアプローチし，学会全体で盛り上げ，その領域の研究を深めて行こうとする気概が伝わってきました（医療系だからかもしれませんが）。非常にスピーディで，少しでも斬新な良い点があればそれを積極的に評価して行こうとする姿勢は，日本の若い心理学研究者を育てて行く上において見習うべき姿勢のように感じました。若い心理学研究者の皆さんの幅広い領域での今後のご活躍を大いに期待したいところです。

ニューズレター執筆をお引き受けしたことで，お世話になった日本青年心理学会の諸先生方や本学会への感謝の気持ちをお伝え出来る機会になりました。有難うございました。文字数制限を超えて余計なことまで書いて申し訳ありませんでしたが，退職を前に研究者人生の一端を振り返る機会を頂き，御礼申し上げます。日本青年心理学会に始まり，日本青年心理学会で締めくくる，というご縁に感謝申し上げます。本学会の益々のご発展を祈念致します。

＜会員から：私のおすすめ，この一冊＞

『しあわせの谷』
エリック・バーン（著）菅沼 憲治・水本 深喜（訳）　田研出版（2026 年刊）
――半世紀を経てお届けする「脱皮」の物語――

水本 深喜
（松陰大学）

このたび，精神科医エリック・バーンが遺した唯一の童話『しあわせの谷』を翻訳・出版いたしました。本書との出会いは，5 年以上前にさかのぼります。

松蔭大学の同僚で共訳者の菅沼 憲治先生から「この本を翻訳しませんか」と紹介されたのが始まりでした。ページを開くと，そこには一匹のニシキヘビが「しあわせの谷」に迷い込み，谷の住民たちとの出会いを重ねながら，「脱皮」を経験していく不思議な物語がありました。読み終えたときに残ったのは，静かで穏やかな幸福感でした。そして同時に，一度読んだだけでは捉えきれない何かが，この物語の奥に潜んでいるようにも感じられました。

原著“The Happy Valley”は 1968 年にアメリカで出版されました。そして菅沼先生がこの絵本と出会ったのは約 30 年前，海外で開催された国際交流分析学会の会場だったそうです。それからさらに時を経て，ようやく日本語の本として世に送り出すことができました。翻訳では幾度も推敲を重ね，松蔭大学の学生たちとの「絵本の会」では，若者ならではの率直な意見を取り入れました。主人公 Shardlu には，親しみとユーモアを込めて「とぐろ丸」という名を与え，野々村 麻里帆さんには，物語の世界を豊かにする温かな挿絵を描いていただきました。

この物語の中心にある「脱皮」は，単なる身体的な変化を超えた，人間の成長そのも

のを思わせます。古い自分を脱ぎ捨て，新しい自分へと向かう。しかし，新しい自分を得たからといって，すぐに成熟するわけではありません。とぐろ丸もまた，脱皮の後に万能感を抱きながら，迷い，葛藤し，再び自分自身と向き合うことになります。その姿は，青年期におけるアイデンティティの模索や，自立への歩みとも重なって見えます。

なかでも印象的なのが，とぐろ丸が自らの尾を飲み込み，自分自身を食べ尽くしてしまう場面です。それは，古来より自己完結と再生の象徴とされてきた「ウロボロス」を想起させます。自分を壊し，そして新たな自分を生み出す――「発達的変化」とは，過去の自分を単純に捨てることではなく，自分自身を引き受けながら，新たな自己をつくり直していくことであると表現しているようにも読み取れます。

半世紀の時を越えてお届けする『しあわせの谷』が，子どもだけでなく，これから自分自身の生き方を模索する青年，そして人生の節目に立つ大人にも，それぞれの「脱皮」について静かに考える時間をもたらしてくれることを願っています。

【書籍情報】　『しあわせの谷』エリック・バーン 著／菅沼 憲治・水本 深喜 訳
田研出版　（2026 年刊） 定価：3,000 円（税抜き）

HAPPY_VALLEY1968

『しあわせの谷』の Instagram です
https://www.instagram.com/happy_valley1968/?utm_source=ig_web_button_share_sheet

---

＜ニューズレターのロゴマークが新しくなりました＞

第 100 号となることを記念して，ニューズレターのロゴマークをリニューアルしました。新しいロゴマークのデザインは，広報・ニューズレター編集委員の信太が担当しました。以下，コメントです。

【デザイン担当者（信太 寿理）からのコメント】
これまでのニューズレターで用いられてきた四角形を重ねたデザインを引き継ぎ，新しいロゴマークを作成しました。また，青年の持つ成長の可能性や生命力を，若葉や草木の緑に重ね，グリーンを基調とした配色にしました。四つ葉のクローバーが持つ幸せのイメージも重ねながら，これまでのニューズレターの歩みに感謝するとともに，今後のさらなる発展への願いを込めました。

＜広報＞

広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ

日本青年心理学会では，会員の相互交流や情報交換の目的で，年 3 回ニューズレターを発行しております。会員は記事の投稿・寄稿および特集テーマや書評などの提案をすることができます。また，ご専門や経歴，最近の掲載状況などを考慮して，広報・ニューズレター編集委員会から記事の執筆をお願いすることがございます。投稿・寄稿をご希望の会員，および委員会から執筆をお願いする会員には，「執筆のお願い」「フォーマ

ット」をお送りします。

＜特集＞
特定のテーマについて，複数の著者が執筆します。年次大会や委員会企画の特集があります。
＜書評・私のおすすめ，この一冊＞＜書評・映像作品ほか評論＞
会員が執筆した書籍や青年心理学に寄与する書籍についての評論です。学術書籍に限らず，文学作品，コミック，ホームページ，映像作品なども取り上げています。自薦・他薦を問わず，投稿・情報提供をお待ちしております。
＜広報＞
学会事務局や委員会からのお知らせが掲載されます。また会員に周知したい情報を掲載することもできます。
＜会員から＞
会員からの情報や意見を投稿することができます。
＜その他＞
上記以外の記事です。

■執筆・投稿・寄稿についてのお願い
1. 掲載された記事の刊行に関する著作権は日本青年心理学会に属します。記事の執筆者としての著作権は，そのまま寄稿した執筆者に属します。
2. 原稿料については進呈しておりません。ご了承ください。
3. 原稿の内容については初出のもので他の学会誌・学会紙などに掲載予定がないものとしてください。再掲や転載などの内容の掲載を希望する場合はご相談ください。
4. 提出された原稿の校正はありません。編集の都合上，若干の修正を行うことへのご了解をお願いします。特に日本青年心理学会ホームページに掲載しますので，執筆者および学会にとって，誤解や不利益が予想される表現等は修正などのご提案をすることがございますのでご了承ください。
5. 執筆においては，文献や資料などの適切な引用を行ってくださいますようお願い申し上げます。同じく個人情報の保護には十分にご配慮ください。
6. その他のご質問やご要望はご連絡を差し上げた担当委員または広報・ニューズレター編集委員会までご遠慮なくお寄せください。

日本青年心理学会　広報・ニューズレター編集委員会
jsyap-nlec@googlegroups.com

事務局からのお知らせ

■第 34 回大会のお知らせ
第 34 回大会（2026 年度）は名古屋で開催されます。

・ 日時：2026 年 11 月 28 日（土）－ 29 日（日）
・ 場所：名古屋市千種区不老町
名古屋大学東山キャンパス　教育学部本館
https://www2.educa.nagoya-u.ac.jp/

開催校は名古屋大学（平石 賢二大会準備委員長）です。大会の情報は随時，Web サイト（https://www.jsyap.org/annual-conference）やメーリングリストでお知らせいたします。ふるってご参加ください。

■事務局が 2025 年 4 月 1 日から変わりました

事務局を和洋女子大学（〒272-8533　千葉県市川市国府台 2-3-1）へ移転しました。郵便局の振替口座や E-mail（seinenshinri@gmail.com)の変更はございません。

■会員管理システム JPASS（ジェイパス）における「会員相互検索」機能について

会員管理システムは，2025 年 4 月から JPASS に変わりました。JPASS は公益社団法人日本心理学会が運用してきた会員管理システムを他学会でも共同利用できるようにしたものです。

「JPASS マイページ」では，オンラインでの年度会費の支払い，会員情報の自己管理，支払い等に関するデータの確認ができます。

2026 年 1 月下旬から JPASS における「会員相互検索」の機能を導入しました。JPASS の「マイプロフィール」にて，「会員相互検索」での各項目の公開可否を選択できます。各項目の公開可否について，必ずご確認ください。

JPASS にログインできない場合には，学会事務局へお問い合わせください。

【参考】「会員相互検索」機能の紹介

・初期設定について

各項目の公開設定は，初期設定ではすべて「非公開」に設定されています。ご自身で設定を変更しない限り，意図せず個人情報が公開されることはありません。

ただし，本学会が JPASS に参加する 2025 年 4 月より前に，他学会で既に JPASS を利用されていた場合については，あらかじめ設定していた「公開設定」が本学会でも引き継がれますので，留意してください。

・表示・検索項目について

氏名・会員種別は必須表示となります。

その他の項目（メールアドレス，住所，所属機関，学歴等）は，ご自身で「マイプロフィール」から個別に公開・非公開を選択可能です。

・その他の項目について

現時点の仕様では，各学会独自の項目を表示・検索することはできません。本学会では，「専門分野」「関心テーマ」「心理関係の資格」が独自項目に該当します。

■学会メーリングリストをご活用ください

現在，ニューズレターや大会・研究会などの案内を，学会メーリングリストによって配信しています。会員であれば，青年心理学に関する研究会や講演会・シンポジウムなどの案内を，このメーリングリストを用いておこなうことができます。セキュリティの関係上，事務局からの発信のみとなりますが，どうぞご活用ください。

日本青年心理学会事務局
Japan Society of Youth and Adolescent Psychology
E-mail：seinenshinri@gmail.com
Website：https://www.jsyap.org
振替口座：00940-6-273417
口座名称：日本青年心理学会

お問合せはできるだけ E-mail でお願いいたします。